

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2011 年度第 1 回研究会報告書

東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

平成 23 年度第 1 回研究会

日時： 2011 年 04 月 10 日（日）午後 1 時 30 分から 6 時 30 分

場所： 東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. クリスチャン・ダニエルス（AA 研所員）
「共同研究課題の主旨説明」
2. 共同研究員全員
「成果出版物について」
3. 山田勅之氏（神戸大学大学院、研究協力者）
「中華世界とチベット世界の狭間で—明代麗江ナシ族木氏土司」

報告の要旨

1. 「共同研究課題の主旨説明」

主査のダニエルスから、新共同研究課題の補足に当たり、下記のような説明があった。

東アジア・東南アジア大陸には、いくつかの「文化圏」が存在するが、それぞれが独自に形成されていたものではなく、相互の接触のなかで成長してきた。本共同利用・共同研究課題では、タイ文化圏に焦点をおきながら、文化圏形成のプロセスを検証する。タイ文化圏は、東南アジア大陸部と中国西南部とを連結する地域であるが、その歴史はベンガル湾からモンゴル高原まで居住する諸民族の文化と言語の影響を受けながら形成されてきた。これまでタイ文化圏の研究は、周辺のミャンマー、シヤム、中国などとの接触・干渉のみが強調され、主に東南アジア大陸部という地域枠の中で分析されてきた。このバイアスを是正するため、本研究課題は、南と北に位置するミャンマー世界、中華世界、チベット・モンゴル世界との交流の中で、タイ文化圏の歴史・文化・言語がどのように生成・変容していったのかを明らかにする。

隣接するチベット・モンゴル及び中華の諸世界でおこった変化が、タイ文化圏に対してどのような影響を与えたか。東アジア・東南アジア大陸における、文化圏が形成されるプロセス、その歴史・文化を動かした諸要因を明らかにすることを目的としている。

(唐立)

2. 「成果出版物について」

2011年3月で終了しました、旧共同研究プロジェクト「タイ文化圏における山地民の歴史的研究」の成果論文集刊行につて事務的な話をしました。(唐立)

3. 「中華世界とチベット世界の狭間で——明代雲南麗江ナシ族木氏土司——」

麗江は雲南省西北部に位置し、古来ナシ族が集住する地域である。1382(洪武15)年、このナシ族の首領であった阿甲阿得は明軍に帰順し、「木」の姓を賜って土司職に任じられた。その一方で、彼らは天順期(15世紀半ば)以降、隣接するチベット人居住地域(中甸、維西、徳欽、バタン、リタン、ムリ)や他の土司支配地域(雲南永寧府、四川塩井衛)を軍事占領し統治下に置いていた。また、木氏土司はチベット仏教カルマ派の転生ラマたちと交流を行い、麗江版カンギュルの施主ともなっていた。

このような歴史的事実から、彼らが中華世界とチベット世界の両世界に対して、影響力を行使していたことが看守される。

本発表では、このうちチベット世界との関係に注目して検討した。

まず、木氏土司の軍事行動のうち、中甸地域に関して『木氏宦譜』や『木氏六公伝』などの漢文史料とチベット語史料である『中甸蔵文歴史檔案資料匯編』を用いて、その詳細を明らかにした。次いで、『木氏宦譜』をはじめとする漢文史料とチベット語史料である『木里政教史』を比較検討しながら、現在四川省のムリ地域に対する軍事行動を明らかにした。そこから、木氏土司が単なる軍事的統治者として認識されていただけでなく、チベット仏教カルマ派の擁護者として認識されていたことを明らかにした。

さらに、木氏土司とカルマ派転生ラマとの関係について検討した。『カルマ・カギユ派高僧伝』、『ケーペーガトン』などのチベット語史料から、15世紀初めよりカルマ派転生ラマと木氏土司の交流や仏事が行なわれていた様子を明らかにした。また、麗江北部・白沙村に今も残る木氏土司建設の仏教建築に関して、麗江版カンギュル(1621年開版)に収められているカルマ派赤帽ラマ6世ガルワン・チューキワンチュク(gar dbang chos kyi dbang phyug)が著した『大蔵経序』と『カルマ・カギユ派高僧伝』の記事を分析したところ、これらの建物がカルマ派の施主である木氏土司が、転生ラマたちを迎える場として機能していたことが明らかとなった。また、『大蔵経序』から、ガルワン・チューキワンチュクの木氏土司に対する態度を検証し、同時に当時の麗江土司・木増が著した麗江版カンギュルの目録『三蔵聖教序』から、木増の仏教に対する態度を検証した。そこから、両者は仏教的価値観を共有していたことを明らかにした。

以上から、木氏土司とチベット世界との関係は「施主・福田」の関係であることがわかる。そこから、明朝から任命された土司というだけではない、木氏土司の異なる姿を描ることができた。(山田勅之)

山田氏の発表に対して活発な質疑応答が行なわれた。まず、チベット人の定義、チベット語でナシ族を意味する「ジャン」、「藩屏」や「木瓜」など用語に関する質問があったの

ち、仏教関係と木氏土司政権のチベット地域進出を可能ならしめたと考えられる要因が議論の中心となった。 仏教については、木氏がそもそもなぜチベット仏教に帰依したのか、麗江のカンギュルはどこで彫られたのか、また、カルマ派転生ラマはなぜ鷄足山を訪れたのかなどに関心が集中した。また、木氏土司政権の隆盛を可能にしたのは何であったかという点について論ずる必要があるのではないかという提案があった。さらに、木氏土司は自分が中華世界とチベット世界の狭間にあったとはたして認識していたであろうか、自己を中心にして中華世界とチベット世界と接していたという見方もありうるのではないか、などの意見が提出された。(唐立)